

台所の一隅に竹篩があつて中に吐瀉物のような滓がある。この滓を日に何度となく見る。その色を目に焼きつけるために。これは私を惹きつけてやまない花のなれの果て。これは紅花の骸だ。

私はいま紅花染めに夢中だ。植物はそれぞれ躰のいろいろな箇所固有の色を秘めているが、花卉に確かな色を湛えているものは意外なほどに少ない。紅花の花は橙色で、黄色と赤色をもつ。このうち水溶性の黄色を水で流して紅くれないの眷属を求めるのが一般的な紅花染めだ。紅花の赤はアルカリに溶け出すため灰汁でもってこれを花より揉み出だす。私はこの灰汁を藁より得る。文字通り藁にすがるのだ。すでに散々水で洗われてくたびれている花を驚かさないうちはじめは少しずつ弱い灰汁で揉む。一度目は抵抗される。なかなか赤を出そうとはしてくれない。しかし灰汁を増やしながら捏ね続けていると徐々に灰汁が茶褐色に色づいてくる。これが染め液。しかし染液づくりは一度では終わらない、終えてはならない。同じことを再び。灰汁にも馴染んできたのか花は先ほどよりたやすく赤を吐きだしてゆく。頬が弛む一方で戸惑いが芽生える。自らの行為の暴力性に。紅花はもともと日本の花ではない。エジプトあたりが原産で、シルクロードを旅し、日本には万葉以前に伝えられている。その道中多くの民族を虜にしながら。その中に匈奴というかつて中国の西域に領土を誇っていた民族がある。彼らは燕支山という紅花の一大産地をもち、婦女子は衣服のみならず口紅や頬紅くれないなどにも紅を纏くれないっていたそうだ。漢民族に攻め入れられその地を失った時の匈奴王は「我が燕支山を失う、我が婦女をして顔色無からしむ」と歌った。そう、彼らは領地とともに匈奴の婦女子の顔の彩りも奪ったのだ。紅くれないは人々を美しく飾っていただけでない、彼らの身体をも守ってくれていたのに。なんて哀しい話。しかしこの漢民族の行為と私の行為にどれほどのちがひがあるのだろうか。生きるということとは他のイノチを奪い続けることでしかないのか。花を揉みしだしているときふつと沸くこの疑念は大きくなるばかり。私はアカを、イノチをこの手で奪っているのだと。花はどんどん痛ましく生気を失っていく。だが三度、四度と繰り返す。ひたすらに手を動かしていると、おこがましいか

もしれないがある点を超えると花がこちらにアカを与えようとしてくれはじめているように感じられてくる。そうなたらもう互いに必死。花はそのイノチを吐きだすのに、私はそれを残らずもらい受けるのに。これゆえ私は他の植物よりいっそう紅花に執着しているのかもしれない。普通、植物からその色を、イノチをもらい受けるには火の助けを借りる。イノチが煮出されていくのを鍋の外から眺めているだけでは手づかみの実感は乏しい。しかし紅花は鈍な私にも生々しく響く。こうして黄も赤も出し尽くした花の色といつたら。このときの色がまだ前回の染め時よりも生き生きといてはいけな
い。未熟な私だが、それが礼儀だ、態度だと自らに釘している。

こうして得られた液に絹がよいよう酢を加えて染め、烏梅の上澄み液に浸す。すると真白き絹は紅の眷属へと生まれ変わる。そこに顕れるのは、息を呑むほどの女人、あるいはひよっとすると女神。彼女は有明の月のような青白き面を扇で隠しこちらに横顔だけを向けてわずかに口角を上げる。その笑みは時に無邪気で屈託がなく、時に自信に満ち溢れ、また時に人を嘲弄するようで、そして時には自らのどうしたって消すことも隠すことも叶わない色香に苦笑している。その気高さには戦慄が走る。妖艶さには恍惚となる。孤高さには哀しみを覚える。すべてが私を魅了する。私はいつも紅花染めに盡しても盡しきれぬ思いをかけているが、その時その時を盡しきれたかと不安の消えぬことはない。ただ亡き骸の黙した色には少し慰められる心地がする。